

ご近所の お医者さん

499

なんくんどう 楠薫堂医院長 栗山隆信さん 一島本町



看取りとACP「人生会議」

厚生労働省は2015年に「終末期」を「人生の最終段階」に名称変更しました。単に医学的な終末の短期間というよりも、介護や生活も含めた少し長めの期間という意味合いです。超高齢社会を迎え、人生の最終段階の時期に、家族や医療・ケア関係者が

どのような

に寄り添うかが大きな課題となっています。患者さん本人の意思を尊重し、尊厳ある生き方を支え、いかに看取るかを考えておく必要があります。「豊かなる恵みに満ちて看取りする

患者さんの意思を尊重

技をいそしむわが心 いよよさやけく新しき道を進まん」「病人の友なる我は名にしおう清き少女の曇りなき姿のまにま看取りする道を歩まん」これは、大阪府医師会看護専門学校

の校歌の1番と3番の歌詞です。「看取」について、患者さんを主体に、ご家族や近しい人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、患者さんの意思決定を支援するプロセス」というACPの考え方を説明しています。ACPは正式な日本語訳が無く、厚生労働省は、分かりやすく馴染みやすい愛称として、公募で「人生会議」と名付けました。大阪府医師会が行なった会員や府

民対象の「看取り」という言葉は、日本語独特の表現で、広辞苑では「病人の世話をする。看病する」とされているように、何も終末期の対応に限るものではありません。「最期を看取る」というように使われませんが、病に冒された時から「看取り」は始まっているのです。日本医師会は、「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)から考える」というパンフレットを作成し会員に配布しました。「将来の医療及びケアに

いとの結果が出ています。しかし、これから本格的に迎えることになる高齢多死社会において、尊厳ある生と死を実現するためには、在宅においても施設においても、ACP「人生会議」の普及が重要とされます。本来の会議は議論して結論を出すことが目的ですが、人生会議は患者さんを中心に話し合うことが主体です。皆さん、「人生会議」してみませんか？(府医師会理事)

アンケイトで、認知度は低